

武蔵野日曜聖書講筵

聖霊の翼

――詩篇第91篇――

1974年1月6日

小池辰雄

キリストの懷の中に わが避所 聖霊の翼 天使の守り わが名を知るがゆえに 聖霊はわが翼

【詩篇91】

1 至上者いとたかきもののもとなる隠れたるところにすまうその人は
全能者の蔭かげにやどらん

2 われエホバのことを宣のたまべて

エホバはわが避所えきじよわが城わがよりたのむ神なりといわん
3 そは神なんじを狩人かりうじのわなと毒をながす疫癘えやみより

たすけいだしたもうべければなり

4 かれその翮はねをもてなんじを庇おほいたまわん

なんじその翼の下にかくれんその真実まことは盾たてなり干なり

5 夜はおどろくべきことあり昼はとびきたる矢あり

6 幽暗くらきにはあゆむ疫癘えやみあり日午ひるにはそこなう勵はげしき疾やまいあり

されどなんじ畏おそるることあらじ

7 千人はなんじの左にたおれ万人はなんじの右にたおる

されどその災害わざわいはなんじに近づくことなからん

8 なんじの眼はただこの事をみるのみ

なんじ悪者あしきもののむくいを見ん

9 なんじ曩さきにいえりエホバはわが避所えきじよなりと

なんじ至上者いとたかきものをその住居すまいとなしたれば

10 災害わざわいなんじにいたらず苦難なやみなんじの幕屋に近づかじ

11 そは至上者いとたかきものなんじのためにその使者輩つかいたちにおおせて

汝があゆむもろもろの道になんじを守らせ給えばなり

12 彼ら手にてなんじの足の石にふれざらんために汝をささえん

13 なんじは獅ししと蝮まむしとをふみ壯獅わかきししと蛇とを足の下にふみにじらん

14 彼その愛をわれにそそげるがゆえに我これを助けん



かれわが名をしるがゆえに我これを^{たかきところ}高処におかん
 15 かれ我をよばば我こたえん

我その苦難のときに偕におりて之をたすけ之をあがめん
 16 われ^{ながきいのち}長寿をもてかれを^{たち}足わしめ且わが救いをしめさん

●キリストの懷の中に

……（手嶋郁郎氏召天に際し原始福音の新年集会で講演したこと等の報告あり。『無者キリスト』の序文原稿の朗読あり。省略）……

詩篇91篇は詩篇46篇と姉妹篇のような、非常に信仰の、神の護りの詩篇として、特に今年を迎えて、私たちのこれからの信仰の戦い、神の護り、その出だしとして大事な詩篇だと思ったので選びました。この原文の読み方はいろいろでありますけれども、文語体で読みますと、

「^{いとたかきもの}至上者^ののもととなる隠れたるところにすまうその人は全能者の^{かげ}蔭にやどらん

「至上者の隠れ家のような所に住まっている者は、全能者の蔭に宿る者は」

と、全体をそういうように訳せないこともない。これは対句になっていますから。

「^{いとたかきもの}至上者^の」「エルヨーン」

という字と、

「全能者」「シャッダーイ」

という字です。ヘブライ語の「シン」という字は「シャッダーイ」「全能者」を表わす印です。

「全能者の蔭に宿っている」

と。天使が上からそういうように呼んでいる、言っていると見る見方が、私は一番ふさわしいのではないかと思う。教会の長老がそう言っているということも、普通の教会ならそういうった解釈の仕方をするでしょうけれども。

「^{いとたかきもの}至上者^の、全能者の蔭に宿る」

とか、

「その隠れたる所に住まう」

とかいうことは一体、ただ想像されている世界ではない。至上者の懷のような所に住まうて、座を占めている、坐っている。そういう「全能者の蔭」ということがどうして事実になるかという、これは祈りの世界です。祈りで神の懷に――私たちは、

「キリストの懷に」

と言うんですが――その中に入らなかったならば、これは言葉が浮いてしまうでしょ。我々は深く祈ったときに、地上にありながら、もう天界に、キリストの中にある。キリストはまた、神さまの懷の中にある。キリストは地界まで降りて来てくださるから。そういう

「宿る」



とか、

「蔭に住まう」

とかいうようことは、どこまでも祈りがその

「懐の中に」

おける祈りなんです。祈ってその懐の中にある。だから、祈りなくしては、今の第一句の天使の言葉を本当に現実とするわけにいかない。そういう意味において、大変大事な第一句だと思う。

●わが避所

そうすると、「私はヤーヴェーに言う」と。これは今度は、作者が言うわけです。

² われエホバのことを宣^のべて

エホバはわが避^{あけとこ}所わが城わがよりたのむ神なりといわん

46篇には、

「神はわれらの避^{あけとこ}所また力なり、なやめるとき^{いと}の最^{いと}ちかき助けなり。」（詩篇

46・1）

「神はわれらの避所また力なり」

と書いてありますが、「このところは、

「エホバはわが避^{あけとこ}所わが城」

となつている。

「わがよりたのむところの神」

というのは、直訳すると、

「私が彼の中に依り頼むところのわが神」

ということ。

「わがよりたのむところのわが神よ」

と、散文的にいえば、

「わがよりたのむところのわが神はわが避所、わが城である」

となるけれども、

「わが避^{あけとこ}所、わが城よ。わがよりたのむ神よ」

と、みんなそういう呼びかけだと思います。

「わが避^{あけとこ}所」

とか、

「わが城」

というときに、これもただ対象化して言っているうちはまだ本ものにならない。「わが避所」と言うと同時にその現実に入っていないくては。即ち、第一句の祈りの中で、神の中に本当



に入っていれば、住んでいれば、そこから第二句の、天使のその言葉に対して答えて、天使の言葉をすぐそのように受けとつて自分が入っている。

とにかく、聖書の言葉が頭の理解に浮いてしまったら、いつまでたってもダメですよ。いつもそれを現実にしなれば。現実にするまでは、そんなにあわてて読まないことです。もちろん、あるときにずうっと聖書を通読することはいい。しかし、本当に聖書に向かって、私は今日は91篇を読むんだと言つて、端座して向かった時には、もう祈りの世界でここに来なければ、この第一句、第二句が現実とならない。現実となったら、もう本当に力がくる。また、本当の平安がくる。

だから、力がないところに平安はない。本当の平安というのは必ずそういったキリストの、神の内住の世界における力の世界です。

我々の居る世界は本当に大変なことなんですから、どうぞ、皆さんはその責任と使命を本当に感じてやっていただかなくては。どういう人にもぶつかっても、必ずそこでもって証ができるんです、自ずから。ということは、こちらが権威をもつて本当の世界の中からものを言っていると、相手が驚く。

「あ、これは頭でものを言っている人ではないな。キリスト教について言っているのではないな」

ということがわかるわけですよ。どうぞ、そういうことで進んでいただきたい。いろいろな問題にぶつかっても、本当の御霊の権威と御霊の愛を持っていれば、必ず勝ちますから。

●聖霊の翼

3 そは神なんじを狩人のわなと毒をながす疫癘より
たすけいだしたもうべければなり

もちろん、「獵人のわな」なんていう言い方は比喩的な言い方です。「毒をながす疫病」、いろんな病気や外敵から助けいだしたもうと。

4 かれその翮をもてなんじを庇いたまわん。
3 節からまた天使の言葉になるでしょ。

なんじその翼の下にかくれん。

特に、

「聖霊の翼」

と私が言ったのは、この「翼」という字からきている。

「かれその羽をもてなんじを庇いたまわん」

と。「羽をもておおう」という。これはキリストがエルサレムを、

「雌鳥がその雛を翼の下に覆うがごとくにお前たちのことを思つて護つてやつたのに、かえつて自分を退ける」



と、嘆かれたですね。

申命記32章に、

「^{わし}鷲のその^{すびな}巢雛を喚起しその子の上にまい翔けるごとくエホバその羽を展^{のべ}て彼らを載せ、その翼をもてこれを負いたまえり。」(申命記32・11)

とある。「覆う」ではなくて、こっちは「負う」方だ。聖霊の翼に乗って、また聖霊の翼の蔭にと。なぜ、

「翼」

ときたら、私は

「聖霊」

と言うかというと、

「聖霊、鳩の如くに降ってきた」

とあるでしょ。「聖霊が鳩の如くに」と言われた。鳩は霊鳥、霊的な動物として象徴される。十字架の上に聖霊の鳩を描いて、我々のもしマークを作るなら、そんなマークを作ったらしいのではないかな。この武蔵野幕屋のマークをもし作るなら、

「十字架と聖霊」

です。御霊の翼は、鳩の翼をもつて象徴されるところの、霊界を天翔けるところの事態です。魂が霊界を天翔けるような自由な事態。また、昇り降りがこれまた自由ですね。私はもし人間でなければ鳥になりたいと正直思う。

神さまは申命記32章12節で懇ろに、

「^{ただひと}エホバは只独りにてかれを導きたまえり。別神はこれとともならざりき。」^{あだしのみ}

(申命記32・12)

と。我々のキリストとキリストの神は私たちに御霊をもつて、御霊の翼をもつて被い、御霊の翼に載せて自由に飛び給う。もうジェット機どころのさわざではない。こういった意味において、「翼」というのは非常に霊的な象徴として、御霊の象徴として翼というものを考えるわけです。

詩篇17篇8節に、

「⁸願わくはわれを瞳のごとくにまもり、汝のつばさの蔭にかくし、⁹我をなやむるあしき者また我をかこみてわが命をそこなわんとする仇^{あだ}よりのがれしめ給え。」(詩篇17・8～9)

とある。

「瞳のごとくにまもる」

というのは、瞳の中に相手の人の姿が映る。瞳の中に人を入れるようなことですから、そこで、

「瞳のごとくにまもり、汝のつばさの蔭にかくし」



という。詩篇36篇7節、

「⁷神よなんじの仁慈はとうときかな、人の子はなんじの翼の蔭にさけどころを得、⁸なんじの屋のゆたかなるによりてことごとく飽くことをえん。なんじはその歡樂のかわの水をかれらに飲ましめたまわん。」(詩篇36・7、8)

「なんじの翼の蔭にさけどころを得」

とある。57篇1節には、

「¹我をあわれみたまえ、神よ、我をあわれみたまえ。わが靈魂はなんじを避所とす。われ禍害のすぎさるまではなんじの翼のかげを避所とせん。」(詩篇57・1)

「なんじの翼のかげを避所とせん」

とある。また、63篇7節には、

「⁷そはなんじわが助けとなりたまいたれば我なんじの翼のかげに入りてよろこびたのしまん。」(詩篇63・7)

「なんじの翼のかげに入りて歓呼せん」

とある。「翼」は「カーナーフ」という字です。

●天使の守り

その真実は盾なり干なり

「真実」という字は「アーメン」という字からくる。

「まこと」

というのは、

「裏切らない」

ことです。神さまは護ろうとしたら、徹底的に護ってください。途中でやめたりしない。愛するならば徹底的に愛しぬく、信じぬく。これが「まこと」なんです。ぶらぶらししない。それは自分の盾であり干である。神さまのまことは盾や干どころのさわぎではない。これはみんな本願の角度ですから。大慈大悲の角度です。

⁵夜はおどろくべきことあり昼はとびきたる矢あり

⁶幽暗にはあゆむ疫癘あり日午にはそこなう勵しき疾あり

されどなんじ畏るることあらじ

これはみんな天使がずつと言っているわけです。いろんな疫病とか外敵とかが来るけれども、決してそれによってお前は恐れることはない。

⁷千人はなんじの左にたおれ万人はなんじの右にたおる

されどその災害はなんじに近づくことなからん

そういう神の護りは固いと。



⁸ なんじの眼はただこの事をみるのみ
なんじ悪者のむくいを見ん

こういう言い方はよく旧約に出てきます。悪は、悪者は因果応報的に滅びていくと。
⁹ なんじ曩さきにいえりエホバはわが避所さけどころなりと
なんじ至上者をその住居すまいとなしたれば

これは第一節と相通しますが、

¹⁰ 災害わざわいなんじにいたらず苦難なやみなんじの幕屋に近づかじ
¹¹ そは至上者いとたかきものなんじのためにその使者輩つかいたちにおおせて

汝があゆむもろもろの道になんじを守らせ給えばなり

ここに、「使いをもつて守る」という言い方がしてありますが、

「天使の守り」

です。天使の守りというものを、我々は気がつかないでいるけれども。キリストも言われた、

「幼児を天使が護っている」

と。我々は知らないけれども、神さまは天の使いをもつて一人ひとりを守っておられると。

ごくまれに、本当に天使が立ったクリスマスがあった。それを実際に見た人がある。私
は見なかったけれども。集まってきた人たちの後に二人ずつ白い羽の天使が立つてしまっ
た。大変なクリスマスでした。あの頃は燃えていましたからね。

「先生の周りには七人の天使がいた」

と、その人が言った。その時は大変なクリスマスで、杖をついて来た人が帰りには杖が要
らなくなってしまうた。胸のわるい人は胸が治ってしまうしね。それから、天的な音楽を
聞いたり、もの凄い天国的な幻を見させられたり、キリストの声を聞いたり、まあ大変な
クリスマスでした。

そういうようなわけで、至上者がその使者をつかわして諸々の道を守ってください。

●わが名を知るがゆえに

¹² 彼ら手にてなんじの足の石にふれざらんために汝をささえん

この言葉を今度は、サタンが使つて、キリストを誘ったわけです。

「手にてなんじの足の石にふれざらしめんとあるから、お前、ひとつ山から飛
び下りてみる」

と。そして、

「主たる汝の神を試むべからず」

と、キリストがやつつけた。即ち、聖書の言葉もサタンが勝手に使いますから、その手に
乗ってはいかん。どこまでも、これは御意を立てて、神の声として受けとつていかないこ
とには、サタンの誘いにぶつかつて、その狡智こうちにひつかかる。それはすぐそのあとに出て



いる。

13 なんじは獅と蝮とをふみ、獅と蛇とを足の下にふみにじらん

「獅子」というのは傲慢の象徴で、これはサタン。それから、「蛇、蝮」というやつはサタンの使いなんだ。サタンの使いで狡智、悪巧みを持っている。それから、見たところいかにも良さそうに、あるいは美しそうに見える。それで、エバも引つかかってしまった。だから、「獅と蝮」というのは、傲慢な力と悪巧みと、この二つを持ってサタンがやって来る。聖書には虎はでてこないな。エレミヤ記には豹が出てくるけれども。あそこをダシテが利用している。そういう獅子的な傲慢の霊が非常に今は跋扈しています。それから悪巧みとこの二つ。「それを踏みにじらん」というのですから。

14 彼その愛をわれにそそげるがゆえに我これを助けん

かれわが名をしるがゆえに我これを高処におかん

これは今度は、神さまの声です。「彼が我を愛する」という、「愛する」「ハーシャック」という字は非常に大事な使い方をしています。普通の「愛」という字とちよつと違う。申命記7章7節に、

「7 エホバの汝らを愛し汝らを選びたまひしは汝らが万の民よりも数多かりし
よるにあらす、汝らは万の民の中に最も小き者なればなり。」(申命記7・

7)

この「エホバの汝らを愛し」の「愛し」にこの字が使つてある。「愛し選ぶ」という。神さまに愛され選ばれた。それはこつちの価値によるのではなかった。全く一方的な愛である。「アガペー」的な愛です。

「汝らは万の民の中に最も小き者なればなり」

と。私たちも小き群だけれども、これは愛し選ばれている。申命記7章7節は、その意味においてよく覚えておいてください。

こちらの詩篇の方は、神さまをこつちが愛しているわけです。この場合の「愛する」という言い方は、神さまに「しがみつく」ような字です。

「愛して、しがみついて、よっかかってしまっている」

わけです。あるいは、

「恋い慕う」

という「恋う」というような意味で使つているところもある。創世記で使つていところはちよつと例外的な意味で使つていいる。あれは34章だったかな。

「8 ハモル彼等に語りていいけるは、わが子シケム心になんじの女を恋う、ね

がわくは彼をシケムにあたえて妻となさしめよ。」(創世記34・8)

この「恋う」という字と同じ字です。とにかく、神さまに、申命記7章7節のように愛をもつて選ばれた。その神にしがみついて、



「我を愛するがゆえに」

ということと、その次に、

「わが名を知るがゆえに」

とあるでしょ。「我を愛する」ということと、「わが名を知る」ということがまた同義語的に使つてある。

¹⁴ 彼その愛をわれにそそげるがゆえに我これを助けん かれわが名をしるがゆ

えに我これを高^{たかきところ}処におかん

と。「助ける」という言葉と、「高^{たかきところ}処におく」ということが同じことです。そういう意味において14節はまたちよつと注意を要する。

「彼はわが名を知るがゆえに」

と言つて、天使に神さまが言つてらつしやるわけです。即ち、

「我を愛する」

ということと、

「わが名を知る」

ということが同じです。キリストの名を私たちが知るということは、キリストを愛することと同じこと。使徒たちが本当にキリストの名を自分の懐の中に持っていた。名に印せられていた。キリストの名に印せられた。また、

「聖霊にて印せられる」

と、エペソ書にあつたと思いますが。そういう、

「私たちにとってキリストの名がどれほど慕わしいか、内側に印せられているもの

か」

ということ。キリスト者というのはキリストという、イエスという名が私たちの中に化^{かた}体^{たい}しているわけです。

だからこれを、

「高きところに置く」

という。一切のものはこれに触れることができない。超絶しているわけです。諸々の災いの中にありながら、相対的現実でありながら、絶対次元の世界に私たちは置かれているわけです。

●聖霊はわが翼

そういうように、キリストの懐、神の懐を避所とし、城とし、なお実力として、

¹⁵ かれ我をよばば我こたえん

我その苦難のときに偕におりて之をたすけ之をあがめん。

「之をあがめん」とありますが、「之を尊ぶ、尊重する」ということ。私たちは御名のゆえ



に存在を尊重されている。「御名のゆえに」です。そして、

16 われ長寿^{ながいきいのち}をもてかれを足^たわしめ且わが救いをしめさん

「長寿」はもう新約の世界では「永遠の生命」です。

「永遠の生命をもつて足らわしめ、わが救いを示さん」

と。即ち、神さまが言う「わが救い」とは、

「私たちに永遠の生命を与えている」

ということですよ。永遠の生命を与えている、救われているということは同時に、永遠の生命を人にわかつという、人を救にもつていくということ。

「愛する」

とは、いつも申し上げているとおり、

「相手を担いあげて救い上げていく」

ことですから。

正直、20世紀のこれからは本当にいろんな意味において危機的であります。烈しい厳しい年を我々は迎えたわけです。この厳しい年にむかつて、それがどんな内容であろうとも、それに対して決してへこたれることなしに行けるのは、このキリストを、

「わが避所、わが力」

として、聖霊をわが翼としているからです。今度は、

「聖霊はわが翼」

と言っているわけですよ。聖霊が我々の翼である。我々は聖霊の翼の上に乗つかるので、陰でもない。聖霊が私たちの身体の翼となって進んで行くような、聖霊と一如となつていくところの事態。我々自身が即ち、鳩みたいなわけだ。

これはもう、獅子が触れようと思ったって、触れるわけにはいかないんだ。空に上がってしまっているんだから。

私は昔よく夢で見た。なにかに追いかけていっていると、腕をはばたくと上へあがっていきんだ（笑）。そうすると、捕まらないわけだ。それが本当におもしろかったな。この頃はあまりみない。あまり追いかけてられないんだけど。そういう夢を見たことがあります。

どのみち、私たちは聖霊の翼そのものを持って飛翔していく。御霊の人です。今は、霊的人物が一番欠けている。我々が本当にその意味で御霊の人、霊的人物になつて自在に人を助け救っていくということに、あなた方が質的に限りなく深く強くなつていただきたい。これをもつてこの新年のおとずれとし、この角度からこの質をもつて天翔けつていきたいと思う。おわります。

